

私の農業記録

第一章・甘夏物語と夢の実現

はじめに

二〇〇六年七月、定年まで五年を残して消防職員を退職した。

十代の時に描いた夢の農業が三十数年の時を経てなんとか整ってきた。

私も、五五歳になって新規就農者となり、二八歳の息子と共に時代が要求する食育・食の安全安心をモットーとした新しい農業、都市との交流型農業への出発となります。

『明るい農村』若い頃よく耳にした言葉である。当時、私も豊かな農業への夢を抱いた一青年であった。しかし現実には厳しいものがあつたが望みは捨てることなくいつも抱き続けていた。常に命題を掲げて、道を選びながらコツコツと、自分の力量の限りを尽くして次世代が農業で生きられる環境の土台づくりを、さらに本物とは何かということを追いかけてきた。

時代の流れや自然環境に逆らうことは到底できないので、そこは自分の流の捉え方で、近代農業の常識とされているものが、原点に返って農業を自然から見つめてみれば非常識であるとし、時代の農業の厳しさも、異常な気象も常であると受容し、これを正面に受け止めて厳しさの中から光を見いだし、異常気象にも順応できる力量と技術獲得の努力をしてきた。結果、必然的に環境保全農業、持続型農業、食の安全安心の農業へとたどりつき、甘夏かあちゃんという花が開き、呼子甘夏ブランドが実を結ぶこととなった。

青年会議が人生の転機に

人生を少々振り返ってみよう。

義務教育を終えて、進学は許されない家庭事情だったが、農業研修所だけでも行きたいという強い思いがあつた。佐賀県畑地営農指導所、県畜産試験場、九州酪農講習所で短期間の履修を終了すると、すぐさま島の人と同様に出稼ぎで青森県八戸のイカ釣り船団に乗り込み、北方四島近くの北の漁場で操業。その後、家畜人工授精師免状を取得していたことから、地元に戻って農協に採用された。

当時、農協の月給は一万円そこそこ。高度経済成長期、働ける男はこぞって関西方面へ出稼ぎに行き、トンネル工事などで月二〇万円にもなっていた時代である。島には老人と女性、子ども、猫しか残っていないという状態だった。

人生の最初の転機は一七歳の時に行かせてもらった「第一三回全国離島青年会議」である。一九歳で「第一五回全国離島青年会議」にも出席し、全国から集まった諸先輩たちの素晴らしい考え方に感化され、島に生きる自分の将来像をおぼろげながら見つけることとなった。

当時、農業の年収は一〇〇万円にも満たなかった。農協職員でも食っ

ていけず四年余りで思いつき退職した。丁度その時、消防職員採用試験の案内が飛び込んできた。男たちは出稼ぎで島を空けるため、もし火災があつたらと不安に思っていた矢先である。人生初めての猛勉強、作文等もすべてを丸暗記の突貫習得であつたが運良く合格、人生設計の道が開けた。さらには佐賀北高通信制に入学、ここで次なる転機の引き金となる生涯の素晴らしき友人、仲間と出会う。このころから私は、積極的なやる気と苦勞することの楽しさを見つけることとなつたように思います。

父の拓いた畑を守り抜く

父は、戦後の食糧難をしのぐために一九歳で農家の婿養子としてこの家に来た。母は、産後の無理がたたつたのか血の道(更年期障害)という婦人病に冒され、寝たり起きたりの生活に陥ってしまった。当時は祖父が葉タバコ栽培をしていたが、父は甘夏栽培に切り替えようと、いち早く、ひとり黙々と山林を切り拓きはじめた。雨の日に土や木の根を掘り起こし、夏は巾着船に乗りながら月夜休みにも月明かりの下でシヨベルと鍬のみで開墾を続け、何年もかけて一〇〇アールもの甘夏畑を作り上げたのである。

この甘夏ミカン畑は父の血と汗の結晶だ。だから、私も公務員になつたからといって畑を荒らすわけにはいかない。我が子へと受けつないでいかなければという強い使命感があつた。

ところが昭和も後期になると、全国の柑橘類が過剰生産となり、市場価格が低迷、暴落が続いた。ある日、父が『甘夏の樹を切るうか』と言い出した。ここまで苦勞して植えてきた甘夏を切るうかとまで言わたのだからよほどの事だつたと思う。私は猛反対した。この島は積雪が無く、霜も降りないという甘夏ミカン栽培の好適地、海風による天然ミネラルによつて美味しい果実が育つ。希少価値も出てきて絶対に生き残れると信じていた。甘夏ミカン栽培に工夫をして消費者が求めるものをつくり、また付加価値を付けて生かしていきたい。そんな思いが湧き上つてきた。

甘夏ミカンで島おこしくかあちゃんグループの奮闘

それまでは本土に渡るにも、肥料や農産物を運ぶにしても船を使つてしか移動、搬送の手段はなかった。

この島に夢だつた橋が現実のものとして架かるのである。早魃に悩まされた島に水も橋の中を通過して島の畑に来るのである。

平成元年に開通した農道橋『呼子大橋』は私たちに大きな夢とチャンスをくれました。

加部島は半農半漁の島で漁業もイカ釣りが主流となり、生きたままでの浜買い、活イカの料理店も島内に三軒できた。呼子大橋の開通は佐賀県北部地方の観光にも拍車をかけ、島にどつと観光客が訪れた。観光客の一人が「加部島の特産もたいしたことはないな」と言つたひとことに、かあちゃんたちは発奮した。「よし、それなら、大きな玉のうーんと旨い甘夏ば作つてやるうばい」と我妻と同郷農家の女性三人で『島ホリおこしく

あちゃん組』を結成し、慣行栽培・販売方法に捕らわれない、主婦の感覚から食の安全を目指した甘夏ミカン作りへの挑戦が始まり、加部島の特産品・土産品にと摘果ミカンを使って甘夏を生かした加工品はできないものかという思いがつのり、地元のムラおこしグループの協力を得て、市内のお菓子屋さんに相談すると快く協力をしてくださり、甘夏ミカンのゼリーが誕生、商品化することができました。

私が情熱を注いで栽培した甘夏ミカンは、さらに、かあちゃんの愛情で甘夏ゼリーとなって現在大ヒットしています。

平成二年に車一台分の車庫を改造して食品加工所の営業許可を取り、平成六年には県の一部助成金を受けて、現在の立派な農産物加工所を建設することができましたし、甘夏ミカンを年間保存できる大型冷蔵庫も、温度、湿度、循環風流、空気の交換、エチレンカット、マイナスイオンの煙霧装置等すべてが独自の研究によって腐敗果を他へうつさずに最小限にして長期間貯蔵に成功したことも、今は感慨深く感激しているところです。

農薬や化学肥料はほとんど使わないで、酵素・微生物農法、無添加の品質にこだわり続けてきた甲斐あって、ロコミや、メディアの取材や全国紙にも数多く紹介されて、『甘夏かあちゃん』という看板は佐賀県を代表するお菓子として全国に有名になってしまった。甘夏のゼリーは東京や福岡の高級ホテルのデザートとしても使われています。

糧を産み出す喜び

私は五五歳、終戦から六年後の生まれである。いわゆる団塊の世代、アナログ世代で、デジタル化にはなかなかつていけないが、ソコソコにやっています。甘夏ミカンの樹も古木は五五年生と、私と同じ年なのである。

幼少の頃は、アイスキャンデーが食べたくても親に五円くださいというひとことが言えなかった。しかし、お金が無くても食料には事欠くことは無かった。主食は米と麦、粟餅に黄な粉を付けてよく食べた。サツマイモにジャガイモ、サトイモも旨い。各種の季節野菜に豆類。ミカン、柿、梨、桃、ビワ、イチジクなどの果物。庭先には蓮池まであったから泥にまみれてレンコン掘りもした。島だから磯海に行けばカジメ、ワカメ、ヒジキ、テングサ等の海藻。ウニ、アワビ、サザエ等の貝類も採れた。釣り糸を垂らせばカサゴ、ベラ、アイナメ等がいくらかでも釣れた。巾着船の魚も父が持つて来るのでイワシの刺身は毎日食べても飽くことがない。クジラは豊富で常食だった。裏庭にはニワトリも放し飼いで餌は米ぬかと野草、浜の砂を与えて卵は毎日食べられた。豆腐は石臼を回し、大豆を引いて作る。味噌も醤油もすべて自給、自家製である。季節の山菜も豊かだった。お金が無くても食はとて豊富で贅沢だったかもしれない。佐賀を舞台にしたドラマ『おしん』のように皆が我慢強くなった。今からすれば信じら

れないようなことである。

いちばん平和な時代の経済成長期に生きた私たちの世代だが、生き残るために自己との戦いを止めてしまったら脱落してしまう。公務員を定年まで勤め、年金生活でもよいのだろうが、先祖が護ってきた農の営みを絶やさず、子や孫へとつなぐのが自分の使命という思いは、いつの時代にあっても不動のものとしてわが心に刻んでいた。

IT時代といっても、食料の生産がなければ人は生きてはいけない。生産つまり、額に汗して働くことは、生きていくための最も大切な営みである。この生産が現代の社会にうまく機能していないから、いまや国じゅうが『虚業』へ傾き、中身はなくとも表面上はうまく回っているように見えるが、逆に、心の貧しさや弱さが露呈し、辛抱できない人が多くなつたように思う。私たちには、祖先から受け継いだ土があり、食料の生産ができる。これは何よりの喜びであり、宝であると思っている。

感謝

父は今年七五歳になるが、人生を人の二倍以上も働き、現在も現役バリバリで農業を甘夏園の管理、収穫を手伝ってくれている。父の並々ならぬ頑張りがあったからこそここまでたどり着いたのである。父は家族の『和』、同じテーブルで家族がご飯を食べる、ただそれだけの幸せのために頑張つたと言う。父をもつこれ以上、いつまでも苦勞させ続けるわけにはいかない。この先は、自分の健康管理の持続にふさわしい程度で好きな農業を手伝ってもらえればいい。今、父から見れば二人の曾孫がよく懐いて、人生の苦勞も報われているようだ。

私は、定年まで五年を残して早期退職する決意をし、家族の了解を得て退職しました。

一生とひとことでは言うけれど、労働の一生こそ真の幸せなのかも知れない。

息子夫婦も農業後継者として甘夏ミカン栽培に取り組んでおり、息子の嫁も農産加工の後継者として店に出ている。妻も人一倍の負けん気と仕事に没頭することで、嫁、姑、小姑間のごたごたにまみれず、よくこまめで頑張ってきてくれた。遠方に住む私の兄弟、親戚にも常によく尽くしてくれるため、親戚が家によく来てくれるし、お店の方も千客万来となっている。おかげで島の甘夏ミカンが全国に有名になった。

この『甘夏かあちゃん』も五〇歳の峠を越えた。これからは苦勞をかけた妻をいたわってあげたいし、妻と共に『甘夏物語』をつづっていききたい。親父共々に「ありがとう」。

土とともに生きる

農業の主体は息子夫婦に預けて、私は、農業の土台、農園管理、土作りをしっかりしていき、納得のいく甘夏ミカンを消費者に喜んでもらいたいし、食育・食の安全安心の農業生産をしていきたい。

ゼリー作りで出る甘夏の残渣も、甘夏畑自体が浄化能力を微生物のはたらきによって最高の状態に高めてくれていたため、腐敗にいたることなく生ゴミが分解し有効な有機循環ができていた。これまでの失敗と研究の蓄積は本物の真髓をつかむ糧となった。過去に経験したことのない甘夏の美味しさを発見、重厚な旨みがついて、口当たりの軟らかな程よい酸味が、風味と共に甘夏の持ち味を最高に引き上げる感触を得た。農薬は使わなくとも本年は樹の生育状況が抜群に良好となっていたため、来年産が楽しみだ。消費者の皆さんが答えを出してくれた時には必然的に日本一の本物ブランドにもなるものと確信しています。

これからが本当の農業再起、一からのスタートである。土に汗を流して、自分の背丈で地に足をつけて土と共に生きたい。

長年かけて作り上げた最高の土になりました。ですから、いつしかの将来にアトムで破壊されることの無いことを願わずにはおられないのです。

昔の記憶にある食糧自給も生活の一部として再現してみたい。

今後の展開

県農林普及指導員等と、以前より常々話していましたように、滞在交流型の体験農業の構想を実現できるようになりました。

二〇〇七年春から息子夫婦(二八歳)が主体となって、甘夏かあちゃんの甘夏ファームツアーリズム、都市の家族等を受け入れる農業体験交流を始める予定で、体験工房も完成し、息子夫婦は全国の優良事例の地へ足を運び勉強するなど準備も着々と進めている。

人生、やりたいことがいっぱいありますが、時の経つのがあまりにも早すぎます。何か一つでも描いた夢に近づき、達成できるなら幸せですね。時を無駄にしないで生きたいですね。

恵まれた自然の共有財産を護り生かしていくために、今何をすべきか、目の前に大きく広がるチャンスをしっかりつかみチャレンジしていきたい。

さあ、人生はこれからです。【私たちの甘夏物語(第二部)のはじまり・はじまり】。